教科間連携による問題意識の育成

―国語科におけるディベート指導を中心に―

雲山　由美子

一　はじめに

本校（滋賀県立甲西高校）は昭和五八年四月に新設された全日制課程の普通科高校である。個性と人格の尊重を基盤に「学習活動と特別活動の両立を目指し、一人ひとりの自己実現を図る」ことを教育目標にし、「地域の要望に応えられ信頼される学校」となるよう努めている。

ここ数年、急速な住宅化による人口増加のため、生徒の学力の格差は拡大する傾向にある。その中で本校に入学する生徒は開校当時から比べるとより均質化されつつある。学校内の雰囲気は落ち着いており受け身的な授業は成立するが、意欲的に取り組んでいこうとする主体性や、覇気の乏しさを感じることが多い。

平成八、九年度に文部省の高等学校教育課程研究指定を受けたのを機に、研究主題を「自ら学ぶ意欲と思考力・判断力・表現力などの能力の育成を図るための指導計画・指導方法および評価の工夫」とし、新しい学力観に立ち、「自らすすんで考えることのできる人間」「様々な情報を自分で取捨選択できる人間」「自分で考えて行動できる人間」「自分の言葉で表現できる人間」を育成し、生徒が自己表現を円滑に図り、問題解決能力を身につけられるような学習指導の方法を検討し、生徒の個性を生かした指導をすることにした。以下に全校での取り組みについて記す。

【研究仮説】

生徒一人ひとりの個性を尊重し、体験を取り入れた授業と、複数の教科にわたって幅広い視点からとらえ考察できるような授業を行えば、主体的に考え、判断し、表現・行動する力を養うことができ、集団でも自分の存在を認識し、生き生きとした高校生活が送れることになるだろう。

【研究のあり方】

上記の仮説から次の3点を具体的な実践方法として設定した。

①体験的学習を実施する。

グループ学習・レポート作成・スピーチ・フィールドワーク等の活動から、生徒の興味・関心を引き出し、主体的に取り組む姿勢を養う。

②教科間の連携学習を行う。

生徒が多角的な視点で物事をとらえることができるように、一つのテーマを他教科と連携した形で授業を行う。

③評価方法を工夫する。
生徒の学習に取り組む意欲や到達度を観るための自己評価や、生徒の発表における生徒間の相互評価など評価の工夫をする。

【国語科の研究目標とその方法】
論理的思考力・自己表現力を養うことを目標とする。
1年次…新聞スクラップや読書をさせ、様々な情報の中から自分に必要な情報を選択し、自分の考えを築く力を養う。
2年次…ディベートやレポート発表により、自分の考えを論理的に述べる能力・態度を、身につけさせる。
3年次…種々の資料を活用してレポートをまとめたり、ディベートの経験をもとに小論文で意見表明できる力を養う。

【研究体制】
研究推進委員会は管理職・事務局・教科主任・進路主任から成り、今回の研究に関する決定機関として機能し、事務局は推進委員会を補佐する。教科会議は週に一度設定され、教科の目標を具体的に実践するための方法や教材の工夫を検討してきた。また、教科間連携学習は年間指導計画をもとに事務局が各教科に提起し、教科会議を経て推進委員会で決定した。・・・（後掲資料、参照）

二　研究の実際

ここでは、各教科の様々な実践の中から国語科の体験的学習を二点、教科間連携学習を二点記し、特に教科間連携学習の中で実施したディベートについては三で詳述する。

体験的学習1　国語科

1　実践とその留意点

夏目漱石『こころ』におけるディベートの実践
（2年現代国語17時間中の5時間）

文学教材を扱う際に、教師の一方的な「読み」を押しつけるのではなく、生徒に幅広い視点から主体的に考えさせる手段としてディベートを2年次に実践する。

ア　ディベートについての基礎知識の周知徹底から、始める。その後、別の論題で模擬ディベートを2回行い、ワークシート・判定用紙などを改善させていく。

イ　「Kの自殺について」失恋が原因であるという見地から賛成派、反対派各3班に分かれる。班の中で、自分達の主張の根拠について話し合いをさせる。また、相手からの質問・反論を予想し、それに対する答えを考えさせる。

ウ　ディベートの方法・審判の基準について再確認をした後、ディベートを実施する。

エ　班評価・自己評価をさせる。

模擬ディベートの段階から発表の仕方、相手の意見を聞くポイントについて指導を行った。

2　生徒の反応・変化

最初にディベートについて紹介し実践することを告げた時、「面倒だ」「やりたくない」という反応も少なからずあった。しかし、一度模擬ディベートを実施し、その感想を書かせた時、ほとんどの生徒が「面白かった」「熱くなった」「またやりたい」と

いう内容を書いてきた。そのためか、その後、班編成やワークシート・判定用紙などの改善点を議論させた時も、非常に活発に意見が出て建設的な議論ができた。その他、リサーチの充実度も回を追うごとに高くなり、それに伴って立論や反駁の内容も向上した。また審判団も、限られた時間内で評価・判定をしなければならないため、より便利な書式を考案するなど、ここでも非常に前向きな態度が見られた。ディベート形式で文学教材を扱うことで生徒達がより主体的に深く作品を読み、授業が活気あるものとなった。

3　今後の課題

一人でも多くの生徒を議論に参加させたいという考えからではあるが、ディベートとしてはかなり変則的なものになったと思われる。特に、審判団の人数を10人程度に絞ったことは、生徒相互の評価という観点からは不充分であったかもしれない。今後は基本的なディベートの型に戻りつつ、生徒相互の評価が充分になされるよう配慮していきたい。また、教師側の評価についても、生徒個々の活動を正確に捕捉できるような方法はないものか、工夫と考察を深めていきたい。その他、個人差は避けられない問題かもしれないが、「発表の仕方」への指導も継続して行っていくべきであろう。また、ディベートに積極的に取り組ませることができるかどうかという点でテーマの設定は重要である。特に今回のような文学教材においてはさらなる検討を要するであろう。興味深いテーマであれば自ずと深く考え、主体的に話そうとする気持ちが強くなるだろう。

教科としては今後、1・2年次に培った論理的思考力と表現力をもとにコミュニケーション能力や小論文の力を養っていきたい。

体験的学習2　国語科

ひとりディベートの実践（3年現代文1時間）

1　実践

①授業のねらい

従来の音声言語によるディベートは、一種高度な学習活動であり、準備にかなりの時間を要し、その上実際に活動する生徒が限定されてしまうといった難点がある。そこで、短時間で全員にディベート的思考活動を行わせ、かつ、それを通じて、多角的な視点から物事を捉え判断する能力、反論を予測しそれに対応する能力、ある見解の論理性の有無を判断する能力、等を、効果的に養成したいと考えた。

②実践方法

ア、学習者にとって身近で、かつ容易に賛否が分かれるようなテーマを設定する。

（例）①高校生に制服は必要である。

②高校生にとって、クラブや恋よりも勉強の方が大切である。

③日本の高校教育において「現代国語」は必要である。

イ、学習者は各自でテーマを選択し、賛否それぞれの立場から、ワークシート上で架空のディベートを展開する。

ウ、学習者は各自のディベートについて、それぞれ論理性の有無という観点から評価し勝者を判定しその理由を記入する。

エ、作品をクラス内で「ところてん式回覧法」を用いて回覧し、相互評価を行う。

オ、他の学習者からの評価を読み、各自自分の考察について再考し、感想を記入する。

③評価

作品を回覧しながら評価用紙に記入していく「相互評価法」を利用する。ディベート入門期の生徒であるということを鑑み、他者の考察を読むことによる情報量の増加という学習効果をより重要視し、得点の高低という結果そのものはあくまで副次的なものとして捉えればよいと考えた。

2　反省と課題

①生徒の反応（様子）

一年次より折に触れて表現活動を行ってきた学年であったので、今回の実践についても全く抵抗無く取り組んでいたようである。限られた時間内で自分の考えを表現しようと試行錯誤し集中に努めようとする生徒の姿が印象的であった。実践後の生徒の感想は、概ね全員が肯定的なものであった。「このような授業によって考えが深まり説得力が出る」、「なぜ自分の意見は論理的でないのかがわかった」といった体の感想が多く見られ、ある程度授業のねらいに到達できたと考えられる。

②改善すべき点

今回の実践はあくまでディベート入門期の学習者を対象としたものでなければならず、一層の発展が望まれるものである。生徒の興味・関心に即応したテーマ、生徒の進路に関わるよう

ひとりディベート

以下の3つのテーマについて、肯定派（A）・否定派（D）、両者の立場からそれぞれ見解を述べよ。なお、（A1）は肯定派立論、（D1）は否定派立論、（A2）は（D1）に対する反論、（D2）は（A1）に対する反論とする。さらに、以上の過程においてその妥当性を判定する第三者の立場を想定してどちらが勝者か判定し、その理由を記せ。

① 高校生にとって制服は必要である。
② 高校生にとって、クラブや塾よりも勉強の方が大切である。
③ 日本の高校教育において「現代国語」は必要である。

わたくし（　　組　　）は ①・②・③を選択します。
A1
D1
A2
D2
Judge

ところてん式評価表（評価基準については指示に従うこと）

氏名	評価	理由
	A・B・C・D	
	A・B・C・F	
	A・B・C・D	
	A・B・C・D	
	A・B・C・D	
	A・B・C・D	
	A・B・C・D	
	A・B・C・D	
	A・B・C・D	
	A・B・C・D	
	合計は　　点！	評価を読んでの感想

なテーマ、専門領域に踏み込んだテーマ、等、習熟段階に応じたテーマの拡大や高度化が必要になってくるであろう。今回培った思考力を基礎とし、漸層的に思考活動が高度化し積み上げられていくことが望ましく、最終的には各自の進路に関わった専門領域について自分なりの見解を持つような生徒を育成できると良いと思う。

教科間連携学習1

現代文…火垂るの墓（グループ学習）
（3年）10時間
日本史B…戦争体験記（レポート発表）
（3年）11時間
O.C.B…火垂るの墓（一斉授業）
（3年）8時間

1　実践

①授業のねらい

戦後五十余年を経過し、現代を生きる若者にとって「戦争」は、日本史の教科書に掲載された遥か昔の出来事にすぎない。教師とて、「戦争」を現体験として語れる者はほとんどいないのが現状である。二度と起こしてはならない「戦争」を、生徒が身近なものとして感じ、また興味・関心を持つように、教材を工夫し、考える場面・時間を多くとれるように努めた。

この3教科間の連携学習では、一つのテーマ（「戦争」）を多角的にとらえ、より深く理解させることを目標とした。

②実践方法

ア　「戦争」をテーマに、現代文では「火垂るの墓」（野坂昭如著）の読解・鑑賞を、日本史では第二次世界大戦の歴史的背景の学習と、実際に戦争を体験された身近な人からの「戦争体験聞き取り」レポートの作成と発表、またO.C.Bでは「THE FIREFLIES' GRAVE」（原作・野坂昭如、編訳・大浦暁生、谷浦健司、マーク・ジュエル）の読解を実施する。

イ　日本史では生々しい体験を聞くことから、生徒に戦争の悲惨さを実感させる。現代文でも「禮子おばあちゃんの戦争体験」などの有線放送番組を聞かせる。「火垂るの墓」の読解については、戦争が弱者（女性や子どもたち）にとっていかに辛いものであったかをグループ討議で話し合わせる。O.C.Bにおける英文読解には、現代文での読解・鑑賞を生かす。英語の苦手な生徒でもスムーズに内容把握ができるよう留意し、興味・関心を持って意欲的に活動させる。

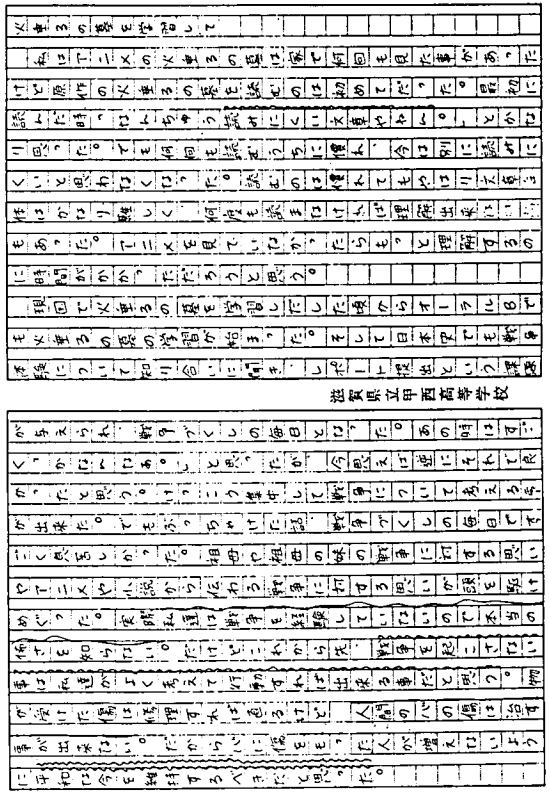
④評価

特別な評価法を用いてはいない。日本史については、レポート提出に対して平常点に加点した。現代文では、事後感想文の形で自己評価させた。

2　反省と課題

①生徒の反応（様子）

ア　対象クラスは、3年生の就職クラスで、進路も決まり、とかく学習に対する意欲が欠如しがちな時期での取り組みで



中国での戦争体験、従軍慰安婦

(1)野戦病院の記録——衛生兵祖父の戦争体験——

3年9組38番

私の祖父は、大正4年6月25日生まれで、昭和14年24歳の時に召集令状を受け取りました。赤紙には、9月5日に入隊して行くことが書かれてあり、その時の気持ちは、お国のために行かなければならなかったので死ぬ覚悟だったのです。

京都の9連隊の6中隊に入隊し、病院の軍医が健康な体であるかどうか診察をしました。診察を受けた中で、百人のうち1人か2人が即日に帰されました。6中隊と7中隊で衛生兵が約百人にいて、3ヶ月間京都病院で、軍医と衛生下士官に衛生兵の教育を受けました。6時に起床し、練兵場で人員確認のため、整列して点呼を受けました。軍隊は、朝・晩必ず点呼があったのです。その後、中隊に帰って、炊事場で朝飯をもらいました。当番は、中隊のご飯とみそ汁を装ったり、片づけて洗ったりしました。8時から、京都病院に衛生の勉強教育を受け、5時に帰ってきて、夜の食事をしてから班内で点呼をしました。8時に就寝、9時消灯でした。

12月27日に広島の宇品港を出発し、船が揺れてご飯がのどを通らない人もいました。30日には上海に上陸し、お正月は勝っている時だったので雑煮を食べて、上海でお祝いすることができました。

1月3日、船で揚子江を600キロメートル上流へ上って着いた所、中支（支は支那つまり中国のこと）の安慶第4野戦病院（安慶は長江下流域）に配属しました。野戦病院には内科・外科・伝染病の病棟があり、そこで戦線の兵隊さんの病気や負傷の方の看護をするのが衛生兵の任務です。患者の兵隊には、歩兵・輜重兵・騎兵・衛生兵などがいました。最初は内科の病棟勤務をし、内科だけで百人もの患者がいる中で10人が看護をしました。無理をするので強腹炎の患者が多かったのです。外科では、150人の患者に対してたった10人の看護でした。多い時で入院患者は300人にも昇り、衛生兵はその数の6分の1、50人だったのです。野戦病院で良くなった人は戦線に行き、治りにくい人は上海から陸中病院に後送して、それでも治りにくい人は内地の本土に帰らしました。

大東亜戦争になってからは、アメリカが支那の兵隊も攻めて来て患者も多くなりました。時々アメリカの飛行機が爆撃し、空爆を受けました。又、移動などで40から45キロメートル歩いて、本隊と一緒についていくこともあったのです。その中でも衛生兵は、駐屯部隊の後方で患者の看護に内数の愛をもって任務につとめました。

そして、6年9ヶ月9日の後、負けて終戦になり、20日間かけて鹿児島に上陸し、汽車で帰ってきました。その時の体重は、48キログラムほどで50キログラムもありませんでした。帰ってからは、芋のつる・南瓜・馬鈴薯を食べていました。米は被農家のまちに送ったため、米の量は3合から2合に減らしたりしました。5年ほど経ってから、苦労はなくなってきました。

戦争というものは命がけで、行ったものでないとわかりません。規律正しい生活で、命令はどんな時でも言われたとおりにしなければ、殺されるか、看護営倉（罰を受ける所）に入れられ戸籍まで汚れてしまうのです。

52年経って、生きていて、辛いことでも軍隊生活のことを思い出したら何事もできます。日本は今、経済大国で最高ということに、ありがたく思って感謝しなければいけません。戦争というものが2度と起こらないように努力し、世界が平和に送れたらいいです。

あったが、生徒たちは、レポート提出・発表・グループ討議など学習活動全般に意欲的に取り組んだ。

イ　生徒は事後アンケートで、「英語、日本史、現代文と、ここ数ヶ月間戦争づけになっていたが、真剣に授業に打ち込めた。自分にとってプラスになった。平和ボケした僕たちにはとても大事な授業だったと思う。」と述べている。

ウ　教科間連携学習により生徒の理解はより深まった。レポート発表などの体験的学習を通し自ら学ぶ意欲を身につけ、自分の意見がもてるようになった。

②改善すべき点

ア　連携学習を行う上で、各教科の進度調整が課題となった。日本史で歴史的背景を押さえた上で、現代文で「火垂るの墓」を読み、内容を理解しながらO.C.Bの授業で英文を読解していくというような綿密な授業計画が必要である。

イ　現代文とO.C.Bでは、同内容の教材を使用し、生徒の興味・関心や意欲を喚起したわけだが、全く別の教材を使用し、一つのテーマを多角的にとらえる教材・教具、指導法を検討し、蓄積することにも力を注いでいきたい。

ウ　グループ討議時の生徒の興味・関心や、発表時の評価、また、その評価をどう評定に結びつけるかも、今後の研究課題であろう。

教科間連携学習2

3年文系クラス現代文…地球環境について考える　（15時間）

化学ⅡB…炭素とその化合物（7時間）

1　目標

地球温暖化を中心とする地球環境の問題は、人類の生命に関わる大きな問題である。折しも二酸化炭素排出を削減するため、世界各国が知恵を出し合う京都会議が12月に開催される時期であった。そこで「環境教育」の一環として化学的な知識から日常生活の問題意識を高め、それをもとに現代文でパネルディベート形式の討論をさせる教科間連携学習を実施することにする。その中で情報　収集・整理能力、論理的思考力、問題解決能力を育てる工夫もする。

2　実践とその留意点

3年の小論文指導で欠かせないテーマが「環境問題」である。様々な資料にあたる中で、化学で学ぶ知識を活かすことによってより深みのある文章を書くことができると考え、教科間連携を実践した。

ア　化学では、二酸化炭素の化学的な特性について学んだ後、二酸化炭素と温暖化の関連についてレポート発表させる。また、温室効果ガスの排出を減らすためにできることを考えさせる。レポート作成では、調べるべき必要事項の説明にとどめ、生徒の主体性を最大限生かせるようにする。レポート発表後は、観点別による相互評価と自己評価を実施する。

イ　現代文では、化学の時間で得た知識や新聞スクラップをもとにパネルディベートの形式で討論させる。さらに「環境問題で私達は何ができるか」という題で小論文を書き、クラスで回し読みをさせる。その後友人の意見を踏まえ、再度同じ題で小論文を書かせる。パネルディベートの立論作成では参考になる図書資料や新聞スクラップの紹介をしたり、生徒への助言を行う。生徒は、討論の後観点別の相互評価を行い、全て終了した後自己評価も実施する。

3　生徒の反応・変化

「自分の考えたこと以外でもいろいろな意見があって、幅広い視野で物事をとらえることができた」「化学の授業で得た知識がそのままディベートに役立った」「自分の日常生活を振り返るきっかけとなった」という感想が多く見られた。パネルディベートでは企業側やNGO側という具体的な立場に立たされるため、準備のために取材し、班で協議し、論理を考え、主張を作成しなければならない。また、相手の反論を予想することも必要である。その結果、環境問題を自分の身近な問題としてとらえるようになったようである。実際に討論の場に立ち、限られた時間の中で考え、説得力のある表現を行うという経験は必ず彼らの「生きる力」につながるであろう。

4　今後の課題

ア　化学では、理解を深める分野が固定されてしまいがちになったので、基礎・基本の学習事項をもとに分野を限定していく必要がある。

イ　現代文では、ディベートだけではなく、最終的に小論文の作成をすることで論理的思考力の育成を目指したが、1年次よりこのような機会を設けていくことが必要である。また、ディベートの評価の仕方についても工夫していきたい。

ウ　今回の教科間連携の学習から、化学の時間に得た知識をもとに現代文の時間にディベートが実施できて内容の理解が深まり、有効だと確信した。

エ　以前に現代文と英語との連携は実施しているが、理科との連携は初めての試みであった。小論文指導の必然性から生まれたものではあるが、意外な組み合わせで生徒にも好評であった。今日的課題に正面から取り組むには、教科の枠を超えた総合的な学習が必要であり、化学に限らず他教科との連携も図っていきたい。

教科間連携学習としては、他にも次の教科で実施した。

- 保　健…1年　「自然環境の保全」
- 家　庭…1年　「ゴミ問題」
- 現代社会…1年　「環境問題」
- 美　術…1年　「ポスター制作」
- 世　界　史…2年　「アメリカ黒人の歴史」
- 英　語…2年　「キング牧師の生涯」

三　授業の実際

1　期間

平成九年十一月、現代文・化学の授業

学習指導案

教科	国語	科目	現代文	指導者	雲山　由美子	指導クラス	3年8組
指導日時	平成9年11月18日(火) 第4限					実施場所	3年8組教室

使用副教材	森を愛さぬ日本人　　新聞スクラップ等 公害と私たちの生き方 都市生活と水 瀕死の琵琶湖 地球温暖化を考える（岩波新書）
単元名	地球環境について考える（環境破壊その解決に向けて）
単元の目標	人間の環境に対する重い責任や使命について理解させると共に、自然環境を保全するために今できるは何かを化学の授業と関連させて学び、国語の授業ではパネル・ディベートの形をとりながら積極的に発言させ、自分の意見を発表するとともに相手の話を正確に聞き取る力、物事を違う視点で考える力、外部から得た情報をもとに論理的に考えをまとめる力を養う。
本時の位置	1．環境問題のビデオ「地球は救えるか」（汚染の中の豊かさ）を見る 2．集団読書、プリント学習 3．『地球温暖化について考える』（岩波新書）の一部を読む 4．パネル・ディベートのやり方を理解する 5．環境保全と私たちの生き方について班ごとに資料を集める 6．「水質汚染」についてのパネル・ディベートを行う 7．「大気汚染」についてのパネル・ディベートを行う（本時） 8．「環境問題について私は何ができるか」という題で小論文を書く
本時の目標	1．大気汚染の問題と自己との関わりを自覚させる 2．パネル・ディベートにより代表者の意見だけでなく、聴衆の討議参加を積極的に促す 3．建設的な解決に達するよう、それぞれが意見を出し合い、身近にできることは何かを考えさせる
備考	生徒に提示する資料は別紙参照

	時間配分	指導内容及び学習活動	指導上の留意点	評価の観点
前時までの要点	1	「地球は救えるか」 ビデオ鑑賞する	問題意識を持って鑑賞する	VTRの内容が理解できたか 本の内容が理解できたか
	2 3	集団読書、プリント学習 新聞スクラップを立場ごとに分ける	地球環境汚染についての情報を得る	
	4 ～ 5	パネル・ディベートの役割を決める 各班で資料集めをする	A．企業側（合成洗剤） B．滋賀県民（家庭排水） C．京阪住民（飲料水利用） D．魚・漁師（琵琶湖）	
	6	「水質汚染」についてのパネル・ディベートをする		

	時間配分	指導内容及び学習活動	指導上の留意点	評価の観点
本時の流れ	導入 3分	本時の内容の確認 司会者より本時のパネル・ディベートの説明 「地球温暖化を防ぐために私達ができることは何か」	「大気汚染について」考えさせる 聴衆は判定用紙の記入をするよう指示する。	授業をはじめる態勢になっているか
	12分	立論（3分×4班） A．NGO（民間活動団体） B．企業側（運送会社社長） C．甲西高校生（資源節約派） D．甲西高校生（現状維持派）	各班の代表者にそれぞれの立場から発表させる	各班がどれだけ丁寧に準備しているか 分かりやすい資料にまとめているか 各班の立場が正しく理解できているか
	7分	代表者討議	各班への問題点、疑問点を質問させる	
	2分	作戦タイム		
	8分	全体討議	中心議題が何かを常に念頭におきながら討議させる	
	2分	作戦タイム		
	8分	最終弁論（2分×4班）	化学で考えたことを参考にしてそれぞれの立場の意見を尊重しながら「我々は今、何ができるのか」について討議させる	単なる対立に終わらず建設的な解決に達するように話し合っているか
	5分	審判・講評 （それぞれの印象を述べる）	公平な立場から審判をさせる 良い点を中心に講評させる	
	まとめ 3分	本時のまとめをする	本時のパネル・ディベートの内容についての講評をする	環境問題について考えを深めることができたか

次時の要点		環境保全と私たちの生き方について 自己評価	この授業を通して自分の知識理解がどのように深まり、環境保全に対する態度がどう変わったのかを自己評価する	自己評価
		小論文を書く	各自がパネル・ディベートで得た情報をもとに環境問題についての小論文を書く	
		小論文の回し読みをする	小論文をクラスで回し読みさせる	相互評価

2　対象

滋賀県立甲西高等学校第三学年・四大短大文系進学コースの四クラス。

本学年は十クラスから成り、このコースは文系短期大学進学希望の生徒が多数を占めている。校内の雰囲気は落ち着いており、指導者の講義内容をノートに写すといった受け身の授業は成立するが、何かを主体的に取り組んでいこうという意欲や覇気の乏しさを感じることが多い。論理的思考能力・表現力を養うことの必要性を感じる。

3　学習指導の展開

★現代文（週五単位）の授業の流れ

【第一次】導入・・・地球環境汚染についての情報を得る。（三時間）

①環境問題ビデオ「地球は救えるか」視聴

②集団読書「瀕死の琵琶湖」（立松和平）

③集団読書「公害と私たちの生き方」（田尻宗昭）

【第二次】資料収集・立案　（六時間）

①パネル・ディベートのやり方を理解する。

②パネル・ディベートの役割を決め、各班で資料集めをする。

③立論・質問シート・パネルを作成する。

【第三次】パネル・ディベート（三時間）＝前頁資料

①模擬ディベートを行う。

②「琵琶湖の水を美しくするために私たちができることは何か」という題でデートを行う。

③「地球温暖化を防ぐために私たちは何ができるか」という題でディベートを行う。

【第四次】小論文を作成する。（三時間）

①「環境問題について私は何ができるか」という題で小論文を書く。

②クラスで回し読みをする。

③友人の意見をふまえ、再度小論文を書く。

④新聞投稿をさせる。

【第五次】評価（一時間）

①班評価・自己評価を行う。

②パネル・ディベート・教科間連携についてのアンケートを行う。

★化学ＩＢ（週二単位）の授業の流れ

単元名「各典型元素とその化合物」（十二時間）

①二酸化炭素と温暖化、窒素化合物・硫黄化合物と酸性雨、塩素化合物とオゾン層破壊、塩素化合物　とダイオキシン、窒素・リンと琵琶湖富栄養化の五点について各項目二班ずつレポートを作成する。

②二酸化炭素と温暖化についてレポート発表をする。

③窒素・リンと琵琶湖富栄養化問題についてレポート発表をする。

⑤塩素化合物とダイオキシンについてレポート発表をする。

⑥塩素化合物とオゾン層破壊についてレポート発表をする。

＝次頁資料

6-1-1

温暖化の原因

主な人口の増加により、ほとんどの土地は開発されたために人は石油・石炭・天然ガスを切り倒した。森林を焼くことによって、人が出す二酸化炭素が増加するばかりになった。

そして、昔は今よりも人口が少ないためにゴミも生活系の物ばかりで、紙や布などは捨てることができたし、人口が急増したために物質の消費量も増え、それに応じた分量が間に合わず、捨てられたゴミは至るところにあふれかえりました。

温暖化による自然災害

異常な長期的な上昇傾向により異常高温の発生数が増加する。また全地球的な中緯度帯に雨が増加するほか、中緯度の降水帯が北に移動する。降水分布の変化にともなって、地域により異常少雨、あるいは異常小雨の地域が増加するとされる。

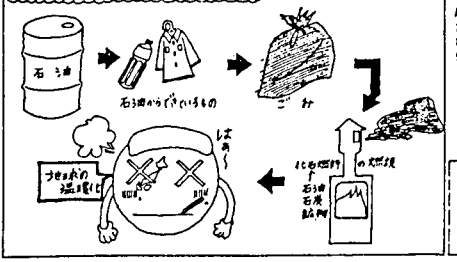
異常多雨 = 洪水
異常少雨 = 干ばつ
} この2つはどんなふうに起こるのか？

※これは、長期的な上昇によって土地は水を保持できなくなり、その結果、雨が降ると地表面に大量の水が川に流れ込んで洪水を引き起こし、乾燥になると干ばつになる。洪水・干ばつともにその地域にはこれまでに大きな被害をもたらす。

member
竹内子、 田口子
[illegible]、 [illegible]子

地球は復讐する NO.1

地球温暖化を図で示すと…



フロンガスと温暖化のつながり

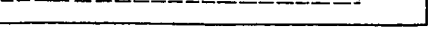
むかしは ほとんどの家庭にフロンガスを使っていたが、今は使用をやめていただいた。

1028年にアメリカのゼネラルモーターズで、人工的に開発された化学的自然界には存在しない。化学的に安定しており、不燃性で毒性がない。金属やくすりの溶剤として用いられ、香水やヘアスプレーなどの噴射剤、冷蔵庫、冷凍庫などに多く用いられてきた。

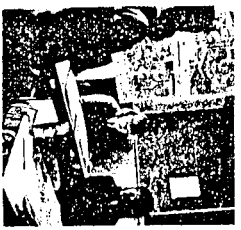
また、フロンは、地球の温暖化との関係を強く深める要因に関係していて、二酸化炭素の1万倍という、大きな温室効果を持っている。

温室効果 = 温室効果の数値は0.5～0.6℃上がっている。(1880年)70年代には温室効果気体は21倍にもなりやすくなるものという。

フロンが使われているもの



パネルディスカッション



6-1-2

二酸化炭素問題

二酸化炭素は、もともと地球大気の主成分であり、光合成に必要なもと物質である。現在、二酸化炭素と温室効果の関係は、明確にとらえられている。しかし化石燃料の使用量の増大にともない、大気中の二酸化炭素濃度が増加しました。大気中の二酸化炭素濃度は南極点の方が低いが、北緯40度はほぼ同じである。

※二酸化炭素源
二酸化炭素は、温暖化の主因のCO₂であり、化石資源を人間がエネルギー源として使用することに起因している。

地球は復讐する NO.2

現代のまとめくは、自然開発という名の自然破壊が進んでいる。人間の勝手な活動で、地球上の暮らすあらゆる生物を苦しめている。また、それは私たち人の暮らすこの地球をも苦しめている。私たち人間は自分の手で自分の暮らすこの地球を破壊している。環境破壊について今よりもさらに多くの人が知識を蓄えることが必要である。そして苦しんでこそ生きるだけにしないように、環境保護に努力していかねばならない。

この温暖化の問題にとりくんで

ぼの中心は第一産業人間集団のいくである。地球規模の温暖化ということを聞いて、とても不安になりました。このままでいくと地球はどうなるのかなと思った。このままでいくと地球はなくなってしまうかもしれない。自然を壊さず、自然について考えることが大切だと思う。

(小坂)

温暖化の問題についてはいろいろ聞いているうちに、大変なことだなと地球が悲鳴をあげているということがわかった。

(山田)

これからは、地球は、ますます悪くなっていく。今、地球がどうなっているのか、あるものが滅びようとしているのだ。

(竹田)

私たちが何気なく過ごしているうちにも地球はどんどん破壊されているということを忘れてはならない。私たちにできることを1人ひとりが考えることが必要だ。私たちは世の中のことを忘れてはいけない。そのため、自分の身につけるくらいの気持で地球を守ることを人間であるべきである。

([illegible])

⑦科学的な内容及び環境問題についてのまとめをする。

4　授業実践

パネル・ディベートは、ディベートを基盤としてパネル・ディスカッションの方法とロール・プレイングの要素を一部取り入れたもので、次の特長を持っている。

①多面的に討議できる。
②ロール・プレイングで討議しやすい。
③一度に多くの生徒が討議に参加できる。

吉田和志先生が考案されたこのディベートに共感し、是非私も実践しようと決意した。（注1）

以下は「地球温暖化を防ぐために私たちができることは何か」という題で行ったパネル・ディベートの実践例である。

・司会者より各班の紹介＝次頁資料
・立論（各班3分）
　A班、NGO（民間企業団体）
　B班、企業側（運送会社社長）
　C班　甲西高校生（資源節約派）
　D班　甲西高校生（快適派）
・代表者討議（7分）
・作戦タイム（2分）
・全体討議（8分）
・最終弁論（各班2分）
・審判判定・講評＝次次頁資料

5　生徒の反応・変化

パネル・ディベート後のアンケートから次のような感想が多く見られた。

・「今回のディベートをすることによって環境問題への関心が深まったと思う。私も水の出しすぎや電気の使いすぎに注意しようと思った。」
・「皆の前で話すことはこれからも必要だろう。自分の意見を強く主張するのに力がつくと思う)。」
・「先日の推薦入試の小論文に温暖化のことが出題されていたので助かった。」
・「一つの立場だけでなく、他のたくさんの立場の考えがわかった。普段友達や親と会話をする時、相手の立場で物事を考えることが少ないので今回他人の目から見た自分を知ることができ、勉強になった。」
・「普段生活をしていく中で考えもしなかった事を考えることができた。たくさんの解決法が出てきて授業が楽しかった。」
・「琵琶湖の汚染がこれほど進んでいることを自分で調べてみるまで知らなかった。」
・「地球に対してもっと真剣に考えていかなければならないということを学んだ。ソーラーエネルギーなどを各家庭に求めやすい価格で普及して欲しい。」

このように、「幅広い視野で物事を捉えることができた。」「自分の日常生活を振り返るきっかけとなった。」と答えている。他者と関わる機会を設定していくことの有効性を確信させられた。

三年　組氏名

1、立論文作成のために

テーマ　地球温暖化を防ぐためには

2、立場・意見

立場	立論で述べるための内容　例	アドバイス
NGO（民間活動団体）	温暖化の原因は？外国での取り組み・日本での取り組み対策・解決法	資料やデータを多く集める 化学でのプリントを活用する 資料パネルを作り、利用する
企業（運送会社の社長）	二酸化炭素ばかりが悪いのか（他は？）自分達が日本の経済発展を支えてきた車をなくしたら困るのは誰か対策・解決法	排ガス規制で何が問題か 運送会社の貢献度を調べる 社長の気持ちになってみる 資料パネルを作り、利用する
甲西高校生（節約しようと努力する人）	温暖化の原因は？化学で学習したことの感想は？対策・解決法　大人に訴えたいこと	自分達の経験を活かす 化学でのプリントを活用する 資料パネルを作り、利用する
甲西高校生（快適な暮らしが大切だという人）	便利さ・快適さを本当に捨てられるのか自分達には関係ない対策・解決法　大人に訴えたいこと	自分達の経験を活かす ピートたけしの意見を読む 資料パネルを作り、利用する
大人（父親・母親）	温暖化の原因は？自分が子どもの頃は？現在車に頼らざるを得ない対策・解決法	親の気持ちになって考える 資料パネルを作り、利用する 化学でのプリントを利用する

（　　）グループ　立論文

今から私たち（　　）グループの立論を行います。

第一に

第二に

第三に

これで（　　）の立論を終わります。

三年　組氏名

1、立論文作成のために

テーマ　琵琶湖の水を美しくするためには

2、立場・意見

立場	立論で述べるための内容　例	アドバイス
企業側（合成洗剤を販売）	合成洗剤の歴史を説明する 無リン洗剤は水を汚さない（？）対策・解決法 便利なのでよく使われている	資料やデータを多く集める 化学でのプリントを活用する 資料パネルを作り、利用する
京阪の住民（琵琶湖の水を飲んで生活している）	琵琶湖は京阪の水がめである 水がまずくてミネラル水を使用している 対策・解決法　住民の気持ち	資料やデータを多く集める 化学でのプリントを活用する 資料パネルを作り、利用する
滋賀県民（主婦を中心とした生活排水）	水質汚染の原因は？　排水だけのせいか？ 大人や親の気持ち　合成洗剤は便利だ 対策・解決法　家庭での取り組み	親にインタビューする 資料パネルを作り、利用する
滋賀県民（甲西高校生）	水質汚染の原因は？　川にゴミ捨ては？ 化学で学習したことの感想は？ 対策・解決法　大人に訴えたいこと	自分達の経験を活かす 化学でのプリントを活用する 資料パネルを作り、利用する
琵琶湖の魚漁師	琵琶湖の水が汚れてしまい、死活問題である　鮒寿司もうまい　奇形の魚 対策・解決法　魚や漁師の気持ち	魚の気持ちになって考える 資料パネルを作り、利用する 化学でのプリントを利用する

パネルディベート審査用紙

テーマ「地球温暖化を防ぐために私たちは何ができるか」　3年8組 ㉑番氏名

グループ（ NGO ）	グループ（高校生　資源節約派 ）	グループ（高校生　快適生活派 ）	グループ（ 企業 ）	
パネリスト（ 太田さん・藤田さん ）	パネリスト（ 加藤さん・ 山本さん ）	パネリスト（ 佐々木さん・ 渡辺さん ）	パネリスト（ 上西さん・ 三川さん ）	
立論　化石燃料の使用増加により温暖化になる。電気自動車を普及させる	立論　自動販売機の数を減らす。電気をこまめに消す。ごみのリサイクル。使い捨て商品を使わない	立論　本人や企業が実行しなければ意味がない。今から節約なんて都合がよすぎる。	立論　日本の経済状況に貢献してきた。運送会社だけが被害がなくなっているわけではない。	←わかりやすい内容か 丁寧に準備ができているか
質問（印象に残った質問）　①CO₂の排出をどのように抑えられていますか？	質問（印象に残った質問）　① 今、やっている事をできているが続けできなくなったらどうしますか	質問（印象に残った質問）　① 自動販売機の数を減らすことはあなたたちにできるのか？	質問（印象に残った質問）　① NGOの団体についてみなさん知っておられますか？	←大切なことを質問したか
応答　私たちの活動だけでは足りない	応答　② 続けることはできるので減らすことはできます	応答　② 本人でなければ関係ない。	応答　② 私たちの仕事はなくてはならない。	←しっかりと答えたか
全体討議（印象に残った発言）　企業側は常に環境について考えているのですか	全体討議（印象に残った発言）　経済はできないではなく、電気の節約ならできる	全体討議（印象に残った発言）　捨てればゴミ、あれば資源、何が利用できるかはできます。	全体討議（印象に残った発言）　なぜ、実際にデモなど公にしないのか	←大切なことを質問したか
最終弁論　やはりみなさんの力が必要　1人1人の意識向上が大切	最終弁論　1人1人の問題として考える。リサイクルが大切。	最終弁論　今にはじまったことではない　今から節約するのはムリ。人におしつけられて節約するのはイヤだ	最終弁論　やはり車はかかせないため運送会社は必要だ。製造業にも必要	←討議をふまえて前向きに考えられたか
話し方・聞き方　説得力があってよい　質疑応答がしっかりしている	話し方・聞き方　自分たちの立場の意見をしっかり言っている	話し方・聞き方　はっきり質問に対して自信をもって答えている	話し方・聞き方　敵の立場の意見がしっかり言っている	←音声・態度
意見・感想　むずかしい立場だが、はっきり理解して答えられていてよかった。	意見・感想　もう少し声が大きければもっと説得力はでたと思う。パネルもうまく利用できていた。	意見・感想　せめられる側であるが自分たちの意見がはっきり通せていてよかった	意見・感想　むずかしい立場であるからしっかり考えられていてよかった。	←全体を通しての感想
合計 17	合計 18	合計 16	合計 16	

A＝3点　　B＝2点　　C＝1点

＊この表にメモしていくように。要提出。
＊最後に２人の審査員に講評をしてもらいます。

パネル・ディベートで具体的な立場に立たされるため、準備のために取材し、班で協議し、論理を考え、主張文を作成する。また、相手の反論を予想することも必要である。その結果、環境問題を自分の身近な問題として捉えるようになったようである。

6　評価における工夫点

以下のような評価の工夫を行った。

ア、ディベートそのものについては立論・質問シートを集めることにより班単位で評価する。

イ、単元の最後に自己評価を行い、特に関心・意欲・態度について評価の参考とする。

ウ、ディベート後の小論文は、回し読みによる相互評価を行う。

エ、再度、書かれた小論文を個人評価の資料とする。

最終的には個人の評価を出す必要があるが、ディベートそのものの活動は班単位で行うので班・個人評価を複合する形で行った。今後は成績に加味される評定よりも生徒自身が自己評価し、自らの成長を実感できる方法を検討していく必要がある。

7　教科間連携による成果と課題

ディベートの立論・質問シート作成のため、準備段階で生徒達は新聞スクラップや参考図書を活用し、情報収集や整理、問題点を把握する活動をすすめていった。しかし、時間的制約があるため、国語の授業時間だけでは充分な成果をあげることが難しい。受験生に時間的な負担をかけたくない気持ちもある。また、国語科の教師の単独の資料作成も専門的な知識面での限界を感じる。ここで、効率の面でも、正確さの面でも、理科の教師による講義がいかに効果的であったかを実感した。化学の時間に、二酸化炭素の性質を科学的に理解し、温室効果ガスによる地球温暖化についての発生のシステムと環境に及ぼす影響についての見識を深めるという授業があってはじめて国語科におけるディベートに結びついたわけである。

生徒達も「化学の授業で得た知識がそのままディベートに役だった。」「化学の時間にに調べたことを基礎知識として理解を深めることができた。」という感想を述べている。

確かに、教科間連携学習は教科間の内容調整、教師間の時間調整等、考えるべき問題点が多いであろう。しかしながら、今まで生徒の意識の中で単発的・個別的・無意識的でしかなかった教科ごとの学習内容が単なる暗記でなく、生きた知識として有機的に結びつくのではないだろうか。生徒が自らすすんで学習し、自分の生活を意識的に変えていく契機となるような授業を創っていきたい。そのためにも、年間指導計画の充実と他教科との連携学習が望まれる。

8　授業を終えて

教室に声を取り戻すこと、生徒の論理的思考力を伸ばすこと、そして現実の問題に対応できる力をつけることを目標に、今回のパネル・ディベートの実践を行った。実際に討論の場に立ち、限られた時間の中で考え、説得力のある表現を行うという経験は必ず彼らの「生きる力」につながると思う。

（注1）・・吉田和志先生『パネル・ディベートを提案する』（明治図書）に多くのことを学ばせていただいている。

四　全校の取り組みの中での成果と課題

1　成果

成果として、第一に生徒の受け身的な授業態度が積極的に授業に取り組む姿勢に変化するとともに、問題意識が芽生えたことが挙げられる。事前アンケートでも中間アンケートにおいても「理解しやすい授業を望む」という回答が圧倒的であったが教師は丁寧な講義をするだけでなく、生徒の主体的な活動を取り入れた授業を工夫するようになった。その結果、事後アンケートでも「体験的学習を授業の中に取り入れてほしい」という回答が約8割を占めた。また「良く理解できた」という答えが多数を占めた。自分達で調べ、疑問点を持ちながら授業に臨む生徒が増加し、体験を通して得た知識が定着してきた。

第二に教師の意識改革がすすんだことである。職員アンケート結果でも8割以上の教師が体験的学習・教科間連携学習の実践に効果があると回答し、6割が必要であると答え、授業方法の改善に積極的に取り組む姿勢があらわれてきた。また、教師間・教科間の交流が行われ、授業についても意見交換ができ、教材の選択や教材研究の方法に工夫がなされた。

第三に生徒の学習意欲を高めるような評価方法を、全教科で工夫するようになったことである。職員研修を行い、評定に組み入れることのできない評価についても考えることにした。特に相互評価の結果は、自分達の努力の度合いを客観的に見ることができ、やりがいを感じた生徒も多かった。この評価結果は、教師による評価と数値に大差がない。このことから生徒達も単に発表時の表現の仕方や上手さを判断基準としていたのではなく、発表内容や理解の深さを評価していたことがわかる。生徒達は教師の評価だけでなく、友人の相互評価やコメントに達成感・充実感を覚えたようであった。

2　今後の課題

課題として次の三点が挙げられる。第一に教科指導についてである。確かに、体験的学習・教科間連携学習を取り入れることによって、生徒達は授業に意欲を示し、主体的に取り組むようになった。しかし、それは教師が指示したことに対してであり、まだ自発的な動きには至っていない。また、教師が投げかけた問いには単発的に答えるだけにとどまっている。自らが新たな疑問を持てるよう、発展的な学習活動を促していかなければならない。教師はそのために情報を収集し、公開授業等による自己研鑽を積む必要がある。体験的学習を取り入れる場合、教師の生徒への支援の仕方を工夫する必要もある。

第二に評価の工夫である。全教科で様々な工夫がなされたが、共通して行ったのは、結果のみではなく生徒がどのように変化したのかという過程の評価である。教師の生徒に対する評価、生徒の自己評価・相互評価いずれにおいても、評価の目的や意義を明確にしていく必要があるだろう。それによって生徒は自らの学習を振り返り、次時の活動への意欲を高め、新しい目標を設定することができると思われる。評価基準、自己評価・相互評価の生徒への返し方、評定との関わり、生徒の授業に対する評価などを継

続して研究していくべきである。

第三に取り組みを学校全体のものにしていくことである。生徒の進路実現のために望ましい教育課程を編成していくには教員相互の研修と話し合いが大切である。クラスや学年に偏りが生じないように、年度当初に年間指導計画の中にどのように体験的学習・教科間連携学習に取り入れていくか考えなければならない。そして、単元における位置づけを明らかにし、実践した資料・教材・方法を共通のものとし、より充実したものにするべきである。特に、教科間連携学習は、今まで生徒の中で単発的・個別的・無意識的でしかなかった教科ごとの学習内容が、生きた知識として有機的に結びつく点で有効である。実施にあたっては、教科間の内容調整・教師間の時間調整、また時間の能率的な使い方を工夫することが課題であろう。

さらに、今後は特別活動の中ですでに取り組んでいる障害者問題や部落問題、在日韓国・朝鮮人問題等と教科学習とを連携させることにより生徒の思考力・判断力・表現力を育成していきたい。また、文化祭や体育祭などの生徒会活動においても、生徒を主体的に関わらせることにより創造力・自己発現力を養い、学校生活を活性化させていきたい。

五　おわりに

教師となって、はや十九年を迎える。平成七年夏より県内の仲間との研究会を始めた。（今年度より会員が十名に増え、『阿星会』改め『淡海ことのは研究会』とした。）また、図らずも引き受けることになった二年間の研究指定校の事務局の仕事から、全校をあげて体験的学習・教科間連携学習に取り組むことになった。国語科の教員十名が同一方向の指導をするだけでも大変な状況であったが、年に何回となく開いた職員研修会や研究推進委員会、教科会議、公開授業、研究授業の中で少しずつ前向きの変化が見られるようになった。特に教科間連携学習については他教科の教師の情報交換が行われるようになり、「生徒が授業をつくる」ことの意義についても論ぜられるようになった。今まで滞りがちであった全教科の年間指導計画書が全学年にわたって提示できるようになったのも大きな成果であった。

個人の力では、生徒を変えることも学校を変えることも、そして自分を変えることも難しいが、教科を越えた仲間とともに広がり、深まっていくことが、どんなに大切で大きな力になっていくかを学んだ二年間でもあった。国語教師としての理念を大切にしながら今後も教師相互の広がりと深まりをめざして努力を重ねていきたい。

（滋賀県立甲西高校）

平成９年度　年間指導計画（第３学年・就専）

	4　月	5　月	6　月	7　月	9　月	10　月	11　月	12　月	1　月
現代文	複製された「私」	悪人礼讃	漢字実務検定のための漢字演習	自然の中に隠れて居る ちがう人間ですよ	衣服の記号論	火垂るの墓	火垂るの墓	スピーチ原稿の作成	３分間スピーチ
古典Ⅱ	漢字 寓話 小説	古文 土佐日記　今昔物語	漢字 諸子百家	古文 枕草子	古文 枕草子　徒然草　方丈記	漢文 漢詩	古文 俳句	漢文 寓話　小説	古文 平家物語
日本史Ｂ	鎌倉幕府の成立 執権政治 元寇と幕府の衰退 鎌倉文化	室町幕府の成立 幕府の衰退と庶民の台頭 室町文化 戦国大名の登場	織豊政権 幕藩体制の成立 幕府の安定　経済の安定 元禄文化	幕府の改革 幕府の衰退 化政文化	開国と幕末の動乱 明治維新と富国強兵 立憲国家の成立と日清戦争	日露戦争と国際関係 近代工業の発展 近代文化の発達	第一次世界大戦と日本 ワシントン体制	恐慌の時代 軍部の台頭 第二次世界大戦	占領下の改革と調和 日本の復興と経済成長 現代の情勢
地理Ａ	現代社会を地図で読む	地図の機能と活用 地図に親しむ 情報の地図化	世界の人々の生活・文化と交流 世界の地形環境　世界の気候環境 自然環境の地域的特色と人間生活	世界の人々の生活・文化の交流 日本の自然	諸民族の生活・文化と地域性 民族について　アメリカ人の生活と文化 アラブ民族の生活と文化	諸民族の生活・文化と地域性 中国人の生活と文化　交流の日を 交流の地域的特色	現代世界の課題と国際協力 深刻化する環境問題、資源エ ネルギー・人口・食料問題	現代世界の課題と国際協力 地球的課題の展望	現代世界の課題と国際協力 メキシコシティの居住・都市問題 アマゾン川流域の熱帯林破壊
数学Ｂ	就職試験対策（塩）				就職試験対策（一般常識）　グループ活動 図形と方程式　数学の広場　レポート作成・発表				レポート作成
化学ⅠＢ	酸と塩基の反応（塩）	酸化還元反応	電池と電気分解	典型元素とその化合物	典型元素とその化合物	遷移元素とその化合物	遷移元素とその化合物	有機化合物	卒業レポート作成
地学Ⅰ	大気・海洋の構造	地球の熱収支	大気の運動 大気の大循環の仕組みの探究	大気の運動 気象の変化の仕組みの探究	太陽系と惑星	太陽系と惑星	太陽の姿	太陽の姿	恒星の世界
体育	体操・集団行動 ゴルフ	男…ゴルフ・バスケット・ソフトボール・サッカー 女…ゴルフ・卓球・硬式テニス・バドミントンス・バドミントン	水泳	水泳	男…ゴルフ・バスケット・ソフトボール・サッカー 女…ゴルフ・卓球・硬式テニス・バドミントン・バドミントン				
英語ＯＣＡ	美国の警察官 地球をむしばむ砂漠化	米国で余っているものは？ パブリックスクール	一人度の効用 歩く楽しみ、ミシンの発明と夢		米国の若者の家庭回帰 日本女性の晩婚化	クレジットカードのワナ 会話上手になるひけつ	幸福とは何か、古代エジプト 人のネ、赤んぼうはなぜ泣く	スピード時代	スピード時代
英語ＯＣＢ	文　時制態	助動詞　名詞　代名詞	関係詞　形容詞と副詞 比較　否定	不定詞	略語　掲示用語 ことわざ　日本語になった英語会話	英会話 Stuation　dril	英語を聞く Video	Speech	Speech